国語教育相談室

小学校

no. 76

特集

教科をつなぐ言語活動

わたしとことば

アホになれんやつがほんまのアホや　鷲田清一

悩み解決

時間数が少ないなかでの指導

教材研究

「感情／生き物はつながりの中に」（六年）

書写

一年生の書写指導

「常用漢字表」改定に伴う措置
平成24年度用教科書　訂正箇所

光村図書

平成23年度版小学校教科書準拠

光村「国語デジタル教科書」「書写デジタル教科書」

光村の「デジタル教科書」が進化しました!

光村「国語デジタル教科書」は，2005年に発売以来，約3,000校の小学校に導入され，大きな反響をいただいています。新しい「国語デジタル教科書」は，多くの先生方からのご意見を反映して，より使いやすく，授業をより楽しく豊かにするためのツールに進化しました。今まで以上に，授業を強力にサポートします。

「国語デジタル教科書」　学校フリーライセンス1～6年　各学年 **68,250円**（本体価格65,000円+税5%）

「書写デジタル教科書」　学校フリーライセンス1～6年　各学年 **10,500円**（本体価格10,000円+税5%）

「国語デジタル教科書」中学校版は，好評発売中！

※ 学校フリーライセンスとは，校内でご利用になるパソコンの台数を制限しない契約です。
※ 国語と書写のセットでご購入いただき，組み合わせてお使いいただけます。また，国語，書写それぞれでご購入いただくことも可能です。

ただいま「実践活用ガイド」を配布中!

デジタル教科書を活用した実践事例をご紹介。
体験版と併せて無料で配布しています。

詳しくは下記ホームページまで!
http://www.mitsumura-tosho.co.jp

光村図書　小学校　国語教育相談室　通巻No.147　2012(平成24)年4月13日発行　定価126円(税込)
発行人＝常田 寛　発行所＝光村図書出版株式会社　東京都品川区上大崎2-19-9　〒141-8675　電話03-3493-2111
http://www.mitsumura-tosho.co.jp　E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp
印刷所＝村田印刷工業株式会社　デザイン＝mint grafix

個人情報の取り扱いに関しては，弊社「個人情報保護方針」に則り，適切な管理・保護に努めてまいります。詳しくは，光村図書ホームページ「光村チャンネル」をご覧ください。
http://www.mitsumura-tosho.co.jp　広報誌の配送停止をご希望の方は，光村図書広報部までご連絡ください。

わたしとことば

アホになれんやつがほんまのアホや

哲学者　鷲田清一（わしだきよかず）

子どもの頃から、だれからともなく聞かされてきたことばだ。アホになれんやつがほんまのアホ。アホは「ばか」とは（たぶん）違ってひとを蔑（さげす）むことばではなく、どこか慈しみにあふれることばだ。じぶんを凹ませたり、あえて笑い物にしたりすることで、その場の緊張を解く、そういう努力というか、気の利かせ方を褒めてやるという心根が、上方の、このアホということばづかいにはこもっている。

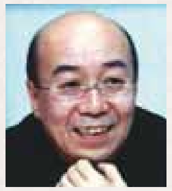
こういった心根は、わたしどものような「学者」にも分け持たれていて、じっさい東京の「先生方」が学会発表の途中で聴衆から苦笑が漏れたら「失敗した」とほぞを噛むところを、関西の「学者」は発表中にいちども笑いが起こらなかったら「きょうの発表はだめやった」と落ち込んでしまう。

阪神・淡路大震災のときもそうだった。夫の圧死についてたとえばこんなふうに語りだす被災者がいた。

「わたしが二階にいまして、一階にいた主人が、二階に妻がいます、助けてくださいと叫んだんです。そしたらな……（一呼吸おいて）二階が一階になりましてん」。

これは詩人の佐々木幹郎さんからうかがった例だが、わたしも泣き笑いといったような語りに当時、何度も接した。笑いをまじえることで悲しみがきら星のように点滅し、感情のそうした振幅によって悲しさがいっそう深まる、そのような語りは、同時に、痛々しくて聴くにしのびない話を、それでも固唾を呑んで聴こうとしているその聴き手の緊張を、さりげなくほどいてくれもした。そういう相手への思いやりが、慰められる側ともいうべき被災者のことばにこもっていた。

じぶんがアホに見られても、ときには悪者にすらなっても、それでまわりが和むならそれでいい……というセンスである。江戸期からぎゅうぎゅう詰めの都市生活を送ってきたひとたちが編みだした、せつなくもたくましい智恵なのだろう。



1949年, 京都府生まれ。哲学者。専攻は臨床哲学・倫理学。現在, 大谷大学教授。1989年,『分散する理性』および『モードの迷宮』でサントリー学芸賞受賞。主な著書に,『「聴く」ことの力』（阪急コミュニケーションズ）,『「哲学」と「てつがく」のあいだ』（みすず書房）,『くじけそうな時の臨床哲学クリニック』（筑摩書房）,『語りきれないこと 危機と傷みの哲学』（角川学芸出版）などがある。

CONTENTS

わたしとことば　アホになれんやつがほんまのアホや ――― 鷲田清一

特集 02 **教科をつなぐ言語活動**

- 提　言　言語活動の充実と他教科等との関連 ――― 松永立志
- 社会科　社会科からのアプローチ ――― 安野　功
- 算数科　相手を意識する力を大切に ――― 細水保宏
- 理　科　具体に照らしながら思考を紡ぐ　理科の言語活動 ――― 渡辺径子

その悩み，解決します！ 1　12　時間数が少ないなかでの指導 ――― 田中洋一・安田恭子

教材研究のススメ 3　16　「感情／生き物はつながりの中に」（６年）――― 輿水かおり

書写の時間を考えよう 10　20　１年生の書写指導 ――― 中込繁樹

24　「常用漢字表」改定に伴う措置
平成24年度用教科書　訂正箇所のお知らせ

教科をつなぐ言語活動

国語科で培った能力を基本に、全ての教科等において言語活動の充実を図ることが求められています。
どのような言語活動が、どのように教科をつないでいるのか――。
まずは、国語科の役割、他教科との具体的な関連の例について、ご提言をいただきました。
それに続き、社会科、算数科、理科それぞれの立場から、その教科における言語活動の重要性、指導の際の留意点などについてのご提言をいただいています。

提言

言語活動の充実と他教科等との関連

鎌倉女子大学教育学部准教授
松永立志

1 なぜ「言語活動の充実」なのか

学習指導要領改訂の最大の柱は「言語活動の充実」であった。言語活動例が内容の(2)に位置づき、言語活動を通して指導事項を指導することが示された。では、なぜ今、「言語活動の充実」なのだろうか。

それは、国語科の指導事項の抽象度が高いことによる。何を教えたらいいか分からないといった声がよく聞かれ、授業改善が難しい状況にあったのだ。そこで、言語活動を通して、教える中身を明確にするという考えが打ち出されたものといえる。

「推薦する」という言語活動について考えてみよう。推薦は、目的があって行われる行為であり、推薦される事物や人物が、その目的に達しなければならない。そのために、推薦する内容（言語内容）を考えることと、その内容をどのような順序で組み立て、どこを強調し、どんな言葉や話し方で推薦するかという方法（言語形式）を考えることの両方を、はっきりさせなければならない。この両者を一体化させた言語活動を、学習指導に意識的に位置づければ、教える中身もおのずからはっきりとしてくるのである。

2 言語活動の充実の留意点

言語活動を考える際に留意したい点がある。

一つ目は、相手や目的、意図を、子どもにしっかり意識させて取り組ませるということである。目的を意識化するには、目的を示す言語活動が、単元全体を貫いていなければならない。つまり、単元の始まりから終わりまで、自分たちの目的を達成していく活動が展開されるということである。相手を意識化するには、相手のもつ言語経験や興味・関心・必要感等の実状に合わせて、言語活動を工夫することが必要になる。つまり、相手によって、自分たちの言語活動の質や方向などが変わってくるのである。

二つ目は、動作化などの「言語によらない」言語活動を、言語とつなぐことである。国語科の授業においては、挿絵・動作化・劇化・音読・絵画・映像・音響・音楽・踊りなど、言語以外の手段や手法を使って、理解・表現する活動が、多く取り入れられている。これらは、言語経験や言語量の不足により、言語だけで理解・表現することが困難な子どもたちに対して、言語を補完する役割を果たしている。しかし、ややもすると、活動すること自体が授業の目的になっている場合がある。これでは、国語科の授業とはいえない。活動をする理由や目的を、教材文の記述に立ち戻って、学級全員で共有する必要がある。このことが、言語を補完する役割を、本来の言語の役割に置き換えていくことになり、言語活動が言葉の能力の育成に直結することになる。

3 他教科等との関連の必要性

思考力、判断力、表現力等の基盤となる言語能力の育成の議論に伴い、習得・活用・探究のプロセスが注目されている。

記録する、報告する、説明する、表現する、評価する、発表する、話し合う、討論するなどといった言語活動を、必然性をもって行えるような内容や機能・目的が、各教科等の学習の中には豊かに存在する。また、国語科の学習以上に、具体的な相手や目的をもった学習場面が数多くある。さらに、言語によらない活動を、言語につなげ、置き換える場面も、また多く存在している。ここに、実生活・実社会に生きる言語の力と直結する、言語活動の可能性の広がり、言語活動の充実につながる授業改善の必要性が見えてくる。

4 教科書教材における具体的関連の例

光村図書「国語」教科書の具体的教材との関連について考えてみよう。その最大の可能性を秘める教科等は、生活科と総合的な学習の時間である。これらの学習では、記録、要約、説明、論述といった言語活動はもちろん、コミュニケーションや話し合い、発表、資料の収集・活用などの活動が、具体的な相手や目的の達成に向けて行われている。特に低学年の生活科においては、次のような関連が考えられる。

学年・巻	教材名	関連
一年下	しらせたいな、見せたいな	家庭と生活 家族の紹介
一年下	いい こと いっぱい、一年生	自分の成長 成長の振り返り
二年上	かんさつ名人になろう	動植物の飼育栽培 野菜を育てた観察記録

算数科の学習では、「各領域の内容は算数的活動を通して指導するもの」と明示され、その重要性が指摘された。この算数的活動における言語の役割として、数・式・図・表・グラフ・具体物などが挙げられる。これらを用いて、説明する、表現する、応用する、判断する、推論するなどの活動と関連性をもたせることが重要となる。

教科書における「話し合う」系列の学習においては、特別活動である学級活動や児童会活動との連携が望ましい。具体的には次のような教材が該当するだろう。

- 二年下「みんなできめよう」
- 三年上「わたしたちの学校行事」
- 四年上「よりよい学級会をしよう」
- 五年「豊かな言葉の使い手になるためには」
- 六年「学級討論会をしよう」

社会科や理科の学習における関連性も、左ページの表のように数多く挙げられる。

そのほか、五年「わたしたちの『図書館改造』提案」と、家族の仕事と自分の役割について家族に提案すること（家庭科）、六年「この絵、わたしはこう見る」と、鑑賞した作品について解説文を書くこと（図画工作）などが考えられる。

5 関連化にあたっての留意点

他教科等との関連化にあたっては、国語科で言語操作の技術を学んで、他教科等へ活用するという流れもあるが、逆の流れについても、効果を考えながら留意したい。

例えば、実際にまず学級会で話し合い、うまくいかない経験や課題をもってから、国語科の学習に入るという流れが考えられる。また、社会科や理科などの学習で、具体的な観察結果や調査データなどを得てから、記録・報告・説明などの技術を国語科で学ぶ過程で、その都度、自分の表現に生かし、しあげていく流れも考えられる。

【社会科との関連】

学年・巻	教材名	関連
三年上	手紙を書こう	・地域公共施設、地域生産業や販売業者の見学の際、依頼状や礼状を書くこと。
三年上	コラム「インタビュー」	・インタビューの内容や方法を考えること。
三年下	本で調べて、ほうこくしよう	昔の暮らしの中で、道具、生活、年中行事などを調べて報告すること。
四年上	読書生活について考えよう	学校のごみ、水道、地域の交通事故や火事などの問題を調べて、アンケートやグラフなどをもとに報告すること。
四年上	だれもが関わり合えるように	地域の土地利用に関して、新田開発地などを見学すること。
四年下	聞き取りメモの工夫	
五年	新聞を読もう	新聞社見学に際し、見学の視点やインタビューに生かすこと。
五年	きいて、きいて、きいてみよう	放送局、農業・水産業施設、工場等の見学でインタビューすること。
五年	コラム「インターネットを使って調べる」	わたしたちの国土について調べること。
五年	グラフや表を引用して書こう	これからの食料生産における自給や食の安全の問題を説明すること。
六年	「平和」について考える	政治とわたしたちの生活における、世界の中の日本と平和について、意見を書いたり述べたりすること。

【理科との関連】

学年・巻	教材名	関連
四年上	新聞を作ろう	・各季節の中での動物や植物について、観察した結果を新聞で知らせること。 ・宿泊体験学習の出来事を新聞で報告すること。
五年	コラム「インターネットを使って調べる」	天気の変化を調べること。
五年	グラフや表を引用して書こう	ものの溶け方の実験方法や結果を説明すること。
六年	「平和」について考える	生物と水・空気との関わりにおける、環境と人間生活のあり方について、意見を書いたり話したりすること。

このように、自分の表現活動をはっきりと意識させたり、活動に対する意欲をもたせたりするうえで、効果的と思われる学習の流れを考えて、他教科等との関連を構想すべきであろう。

また、この関連を学校全体の取り組みとしていくために、学校としての関連を押さえた教育課程の年間指導計画を、確実に整備しなければならない。一人一人の担任に委ねるべきものでは決してないのである。

松永立志（まつながたてし）

鹿児島県生まれ。横浜市教育委員会事務局教育課程開発課長，学校教育部長，横浜市立東小学校校長等を経て現職。主な編著書に「小学校新学習指導要領の授業 国語科実践事例集 1年／2年」（小学館）などがある。小学校学習指導要領解説国語編作成協力者として，学習指導要領の検討に当たった。光村図書の小学校「国語」教科書編集委員を務める。

社会科

社会科からのアプローチ

國學院大學人間開発学部教授
安野　功

1 社会科における言語活動の役割

社会科は、社会生活、すなわち「社会との関わりの中で営まれる人々の生活」を学ぶ教科である。社会は、人間相互の関わり、人間を取り巻くさまざまな環境との関わりを通して、人間がつくりあげたものである。そうした社会との関わりの中で営まれる人々の生活が、どのような意味をもっているのか。――それを解き明かしていくのが社会科の学習である。

この学習においては、言葉及びそれを用いた学習活動、例えば、見学メモを書く（記述）、そのメモに自分の意見を書き加える（解釈・意味づけ）、対話や話し合いを通して互いの考え（意味づけ・解釈）を伝え合うことで、自らの考えや集団の考えを発展させるなどの言語活動が必要不可欠である。

それはなぜか。社会科の学習においては、言葉及びそれを用いた学習活動が、次の三つの役割を果たしているからである。

①社会に生きる人々の行為や相互の関わりの様子、出来事などを、**事実として捉える（記述する）**際のツール・有効な手段として

②事実として捉えた人々の行為や相互の関わりの様子、出来事などの社会的な意味を考え、それを明らかにしていく**思考活動（意味づける・解釈する・吟味する）**を促進するツール・有効な手段として

③他者とのコミュニケーションによって生まれる**協働的な学び（みんなで学び合う）**を支えるツール・有効な手段として

2 社会科における言語活動のポイント

社会科の授業は、見学メモ、対話、話し合いなど、さまざまな言語活動を組み合わせて展開されている。その中でも、小学校社会科で特に大切にしたい活動が次の二つである。

■体験を言語化する活動

見学や調査など、社会にあるものや社会で働く人などと、直接関わって学ぶ体験的な学習（現場の学び）を大切にしたい。そのためには、体験（具体）と言葉（抽象）をつなぐ表現の指導が重要となる。さらにいうと、絵カードによる表現、平面地図への再現、動作化など、言葉だけに頼らない表現活動を組み込むなどの活動を工夫することが肝要である。言葉の意味を、体験と結び付けてイメージ豊かに獲得させるのである。この過程を経て体験的に獲得した言葉は、より高度な言葉（社会科用語）の意味を考え、理解する際のよりどころとなるからである。

■言語による思考・表現活動

体験の言語化と併せて、言葉による思考・表現活動も大切にしたい。個々の子どもが社会をどう見ているのか、どう受け止めているのか、すなわち、個々の子どもの見方や考え方を言語によって表出させ、それを互いに伝え合う活動を通して、みんなの見方や考え方を探っていくのである。

具体例を挙げてみよう。**写真1**は岐阜県海津市で撮影されたものである。これを、第五学年の「低地の暮らし」について学習する際の導入部で、次のような流れで活用する。

①写真を見て気づいたことや、「おや！」と思うことをペアで伝え合う。

②「屋根の上にトラックがある／トラックの下に屋根がある」ことについて、「そう見えるのは、本当は～だからではないか。」という形で、自分の考えをノートに書く。

こうした一連の言語活動を積み重ねると、

・家より高いところに道路があり、その上を車が走っているのではないか。

・道路より低いところに家が建っているのではないか。

という二つの解釈が生まれてくる。この解釈のズレが、「家が普通の高さで道路が高いのか、それとも家が低いのか」という疑問を誘発する。

その疑問を解き明かすため、**写真2**を提示する。そして、「道路（堤防）、水面、建物の建つ土地の高さを見比べてノートに図で書き表す」という言語活動を通して、低地の土地の様子を捉えていく。

さらには、「―なのは～のため」という話型とともに**写真3**を提示し、川に囲まれ、水とともに生きる低地の暮らしに目を向けていくのである。

▼写真1：写真上部をよく見ると，トラックが屋根の上に乗っているように見える。

▲写真2：真ん中に走る道路がいちばん高く，手前に広がる運動場は，奥の川の水面よりも低いところにあるように見える。

▲写真3：家（水屋）が高い石垣の上に建っているのは，水害に備えるためである。

3 国語科との関連を図るために

ポイントは三つある。一つは、「話型」「つなぎ言葉」「問い・考えと根拠・結論の文脈」など、国語科で学んだ言語操作のしかたを活用し、子どもが各自の考えを組み立てる学習活動を工夫すること。

二つは、国語科で学んだ言語による意見交流のしかたを活用し、それぞれの考えを大切にしながらも、みんなの考えはどうなのかを吟味・検討し合い、社会的な見方や考え方の成長を図ること。

いま一つは、社会科での言語活動を豊かに展開し、言語力を養うことである。

安野（やすの）　功（いさお）

埼玉県生まれ。埼玉県内の公立小学校教諭，指導主事，文部科学省初等中等教育局教科調査官を経て，現職。著書に，『小学校社会　板書で見る全単元・全時間のすべて』（東洋館出版），『安野功の授業実践ナビ　社会』（文溪堂），『ことばの力が育つ対話型学級経営』（日本標準）など。小学校学習指導要領解説社会編の編集にあたる。

算数科

相手を意識する力を大切に

筑波大学附属小学校副校長
細水保宏

1 算数科の「言語活動の充実」

学習指導要領解説算数編には、思考力・表現力の育成について「児童が具体物を用いたり、言葉、数、式、図、表、グラフなどを用いたりして、自分の考えたことを表現したり、友達に説明したりする学習活動を取り入れることが重要である。」とある。

つまり、算数科における「言語活動の充実」には、主として「国語科で育てられた言語能力を算数の授業で生かしていく」というやり方と、「算数科の本質に迫る活動を通して、具体物の操作、言葉、数、式、図、表、グラフなどが活用できるようにしていく」というやり方が考えられる。

特に、「式」は、算数科でなければ育てられない言語である。そして、「式」は世界共通語であり、各国の言語を知らずとも自分たちの考えを伝え合うことができるというよさをもっている。「式指導の充実」が「言語活動の充実」ともいえるのではないか。

1+2+3+4+5+6+7+8+9=45

①10×4＋5
1＋2＋3＋4＋5＋6＋7＋8＋9

②9×5
1＋2＋3＋4＋5＋6＋7＋8＋9

③10×9÷2
1＋2＋3＋4＋5＋6＋7＋8＋9＝●
＋9＋8＋7＋6＋5＋4＋3＋2＋1＝●
10 10 10 10 10 10 10 10 10

例えば、一から九までの和を求める問題で、子どもたちは、右のように多様な方法で解決を図ろうとする。自分の方法を図や式で表すことにより、相手に考えを伝えることができ、同時に、式を読み取ることにより、相手の考えを理解することができる。

2 数学的な考え方を引き出し、子どもの言葉に価値づける

算数科では、考えを説明しようとする際、「まず」「次に」「だから」といった考えの順序を示す言葉や、「例えば」「でも」「だったら」「もし、～だったら」といった考えの方向性を示す言葉が引き出される。これらの言葉を取り上げ、価値づけ、意識づけていくと、思考力・表現力を伸ばしていくことができるものと考える。

例えば、国語で何かを説明する学習で、算数の問題解決の場面を題材に取り上げて書かせる。すると、言葉を使って書く場が生まれ、筋道立てて考えたり、表現したりする力を高めていくことができるだろう。

3 ポイントは「目的」「内容」「意欲」

今後は、話したり書いたりして説明するという「言語活動」が増えてくるだろう。

「話す」活動では、例えば、「賛成です。なぜならば～。」「反対です。なぜならば～。」と、結論を先に言ってから理由を言うといった「型の指導」が行われていくことが予想される。ただ、「型」は、それを使う目的を理解したうえで身につけていかなければ、本当に使えるものにはならない。

「書く」活動も同様である。たしかに、全国学力・学習状況調査の「B」問題に見られるような、言葉で書いて説明することを、多くの子どもたちが苦手としているのも事実である。しかし、ただ言葉で書いて説明させればよいわけではない。何をなんのために書かせるのか、その目的と内容を明確にして書かせることが大切である。

また、ペア学習やグループ学習で話し合う活動が増え、交流の場が多くなると、一見、授業が盛り上がっているように見える。しかし、問題となるのは、そこで話し合っている内容が、教科の本質に迫るものであるかということである。教科の充実のために、その点には留意したい。

「聞く」「読む」活動に関しても、「話す」「書く」活動と表裏の関係にあるため、目的をしっかりもたせずに行っても、ほとんど意味をなさない。

つまり、「言語活動の充実」のためには、何をどのように、なんのために表現させるのかを明確にもち、子どもたちが思わず考え、表現したくなるような、「意欲的に取り組みたくなる場」を創っていくことこそが肝要なのである。

例えば、好きな二桁の数を選び、ひっくり返してできた数との差を求める問題を提示する。つまり、選んだ数が64なら46を作り、64－46＝18の計算をするのだ。そして、数を変えてその操作を何回か繰り返す。最初は計算練習をしているにすぎない。83－38＝45、52－25＝27というように。しかし、そのうちに、子どもたちはこの計算の答えに何かきまりがありそうなことに気づきだす。ここに、考える場が生まれてくる。きまりを見つけた子どもは、周りの友達に言いたくてたまらなくなる。それが表現したくなる場である。その場で、自分が見つけたきまりを、「答えが9の倍数になる」「(□－△)×9になる」といった言葉や式で表現し、相手に伝える方法を学ぶことになる。さらに、きまりが分かってもなんとなくしっくりしない気持ちから、「なぜ、このきまりが成り立つのか」「いつでも成り立つのか」といった、自ら考えたくなる場が生まれてくる。

4 大切にすべきは、相手を意識する力である

近年、日本の「授業研究」を紹介するために外国で授業をすることが多くなった。メキシコで算数の授業を行ったときのこと。私がスペイン語を話せないと分かった子どもたちは、授業中、ゆっくり、そして繰り返し必死で伝えようとしてくれたのである。「相手を見て、自分の表現を変えていく力、これこそが表現力である」と実感した。

「型」から入る文化の日本。ともすると、そこに相手が不在になっている場合がある。「言語活動の充実」で、相手を意識する力を育成する。どの教科でも、このことを意識して指導に臨まれたい。

細水保宏（ほそみずやすひろ）

神奈川県生まれ。横浜市内の公立小学校教諭を経て，現在，筑波大学附属小学校副校長。横浜国立大学教育人間科学部非常勤講師。主な著書に，『確かな学力をつける板書とノートの活用』（明治図書），『算数のプロが教える授業づくりのコツ』（東洋館出版社）など。小学校学習指導要領解説算数編作成協力者。

理科

具体に照らしながら思考を紡ぐ 理科の言語活動

上越教育大学特任准教授
渡辺径子

1 言語を使って紡がれる問題解決のプロセス

小学校理科の授業では、問題解決の能力を育成するために、次のような学習のプロセスを重視している。

- 自然の事物・現象に出会い、そこに問題を見いだす。
- ←問題に対する自分の予想や仮説をもつ。
- ←予想や仮説を確かめる方法を考える。
- ←実際に観察や実験等を行い、結果を得る。
- ←結果を整理し、自分の予想や仮説に照らして分析や解釈をする。
- ←分析や解釈を他者と相互に話し合う。
- ←話し合いの結果から結論を導く。

この一連の過程で、子どもたちは、思考を紡いで語彙を獲得し、言葉を使って考え、問題を解決していく。

観察や実験等のなかで、目の前のリアルな具体を表現するための言葉が必要となる場面が出てくる。例えば、第三学年、モンシロチョウの卵を育てる学習では、対象の形態の変化（変態）を説明することが難しくなる。そこから、その具体と「卵」「幼虫」「蛹（さなぎ）」「成虫」という理科用語（語彙）、さらには順序性が結び付くようになる。また、第四学年、水を温めたときの変化を考える学習では、ビーカー内の水が百度に達し、泡でいっぱいになった状態（具体）と「沸騰」という理科用語（語彙）とが結び付く。

このような語彙の獲得から、日常生活に普遍化することによって思考の幅が広がり、具体の「実感」を保障することになる。そして、学習指導要領改訂で新たに理科の目標に加わった、「実感を伴った理解を図る」という文言が実現されていく。

2 プロセスの中の具体的な言語活動

上述の各過程の中に見られるいくつかの言語活動について、具体的に見ていこう。

「自然の事物・現象に出会い、そこに問題を見いだす」過程では、子どもたち自らが問題に気づくようなしかけを、教師が事前に用意し、事象として示すことが重要となる。子どもたちはそれに反応し、既知の知識を結び付けて考え、その考えを発言・記述するようになるからだ。このように、子どもどうしの意見交流を経て、学級全員の問題をつくりあげることを意識したい。

次の「問題に対する自分の予想や仮説をもつ」過程ではどうか。理科においては、観察・実験が全てであるように捉えられがちだが、そうではない。この後の過程で行う観察・実験は、この過程で子どもが抱く考えを確かめるための「手続き」なのだ。したがって、ここで、自分の考えをしっかりノート等に記録させておく必要がある。

このように、理科における言語活動は、子どもたちが初めにもった問題を、仲間といっしょに追究していく過程での、「思考活動」そのものであるといえる。

3 言語を使って往き来するリアルな具体と概念化された抽象

第六学年に、「植物の葉に日光が当たるとでんぷんができる」ということを確かめる学習がある。身の回りの植物の葉をサンプルとして、「日光を当てる／当てない」という比較実験をし、学習を進める。そして、「サンプルとした植物の葉では、日光を当てるとでんぷんができる」という情報と、第五学年で学んだ「植物が育つには日光が必要である」という知識とを結び付け、「植物の葉に日光が当たるとでんぷんができる」「それを自らの養分にしている」という論理的な結論を導いていく。具体の実験から、一般化・抽象化した概念を導くという言語操作能力を養うのだ。さらに、そこからまた「この植物はどうか」と、実際の自然の仕組みなどを考える。それにより、「実感を伴った理解を図る」ことに広がりが生み出されていく。

4 言語活動を活性化する学習形態

理科ではしばしばグループ学習が行われる。その際、「ジグソー学習」を取り入れると、個々の子どもに学習の当事者意識をもたせ、有能感や成就感を高めるような言語活動を展開することができる。

〈ジグソー学習の例〉

❶四～五人程度の小集団を、基本班として編成しておく。
❷全体に示された複数の問題について、基本班内で一人一つとして担当を決める。
❸同じ問題を担当する子どもどうしが集まるよう、新たな観察・実験等の小集団を編成する。
❹同じ問題を共有する新たな小集団で、問題の解決方法を考え、観察・実験等を行って結果を導く。
❺基本班に戻り、自分が行った観察・実験等に関する説明及び結果を報告する。

基本班には、自分以外に同じ問題を追究した者がいないため、一人一人が責任をもって、観察・実験、結果の説明をすることが求められる。「自分が担当した問題しか直接体験できない」ということを踏まえながらも、この学習形態を上手に取り入れ、言語活動にも必然性をもたせたい。

▲基本班に戻り，自分のした実験やその結果について報告する子どもの様子。班の仲間からの質問に対しても答える責任が生じる。

渡辺径子（わたなべみちこ）

新潟県生まれ。上越教育大学 学校教育実践研究センター 特任准教授。新潟県内の公立小学校教諭を経て，現職。主な共著書に，『環境教育と地域観光資源』（学文社），『環境教育指導プラン　低学年』（文溪堂）などがある。小学校学習指導要領解説理科編作成協力者。

その悩み，解決します！ 1

時間数が少ないなかでの指導

日々、子どもたちを教える先生方が抱えるお悩みの中から一つを取り上げ、解決のためのアドバイスを掲載する新コーナーです。今回は、田中洋一先生と安田恭子先生にご登場いただきます。

お悩み

教科書で想定している教材の配当時数が全体的に少なくなり、時間内に学習しきれないことがあります。どのような考え方で、どのように指導していくのがよいのでしょうか。

一つ一つの教材にかけられる時数が少ない、つまり、教科書全体の教材数が多いことにはどのような意味があるのでしょう。まずは、指導の際の考え方についてお答えいただきたいと思います。

東京女子体育大学理事・教授
田中洋一

解決のために

1 指導事項を絞り、多様な教材に出会わせる

私たちは日常生活でどのように文章を読んでいるのでしょうか。例えば電気製品を買ってきて説明書を読む場合は、説明書の目次や索引を使って、必要な情報を探します。また、環境問題について知りたいから本を読むような場合は、ざっと全体を読んでおいて大切そうなところを見つけて、詳しく読むようなこともします。文学の読み方はもっと多様です。ストーリーを楽しむだけでなく、登場人物に自分を重ね合わせたり、描写を味わったりしますが、これも一回の読書ですべてを味わうのではなく、本の内容やそのときの気分に応じて楽しみ方を選んでいるのです。

このように、日常生活では目的や時間、状況などに応じて多様な読み方をしているのですが、国語の授業で行われる「読むこと」は、かなり固定化されていました。説明的な文章では、第一段落から順に読み、指示語や接続語、文末表現などに着目して筆者の主張や結論を理解します。文学的な文章でも、第一場面から詳細に読み、展開、心情、描写などのすべてを読み取らせようとすることが主流です。そのために一つの教材（単元）に多くの時間を割くことになり、その結果、国語の時間は多くの児童に退屈な時間、分かり切ったことを繰り返している時間と捉えられています。

文章の内容を読む力は、一語一語に即して詳しく読み取る力だけではありません。一読して要点を捉えたり、自分の探している情報を短時間で見つけたりする力も大切なのです。また、書かれている事柄について自分の意見をもつ力も必要です。これらの力の育成のためには、授業でも多様な読み方が行われる必要があります。

まず、一つの教材で教えられることをすべて教えようとするのはやめましょう。それは教材に振り回された授業なのです。授業では、まず教えるべき事項を決めて、そのために教材を活用することが大切です。つまり、単元での指導事項を絞って指導するのです。そうすることによって、児童は国語の授業で何を教わっているのかが分かりやすくなり、いろいろな読み方の特徴を理解できます。そうすると必然的に指導時間は少なくなるのです。また、短い時間で単元が終われば、結果として、一年間に多くの文章と出会えることにもなります。

一つの文章を繰り返し読ませて詳細に読み取ることが悪いわけではありませんが、国語の時間がいつもそのような展開では、育つ力も限定的になりますし、児童は授業に飽きてしまいます。国語の授業では、目的や状況に応じた読み方が工夫できるように子どもたちを育てたいものです。

田中洋一（たなかよういち）
東京都生まれ。東京都の公立中学校教諭、教育委員会指導室長等を経て現職。中央教育審議会国語専門委員、学習指導要領中学校国語作成協力者などを歴任する。著書に『小学校古典指導の基礎・基本』『観点別学習状況の評価規準と判定基準』（図書文化社）などがある。

今度は、個々の教材の指導計画という視点から、どのような工夫が考えられるかをお答えいただきます。

解決のために

2「これだけは欠かせない」という学習を見極める

元新宿区立西戸山小学校教諭
安田恭子

「この教材文の配当時間、五時間になっているけれど、時間内に指導しきれるかしら。」

「ええっ、今度はたったの四時間。こんなに長い作品なのに無理だよ。」

教科書の教材について、学習の手引き等に忠実に指導をしようとすればするほど、指導時間が不足するという訴えの声を多く耳にします。限られた時間の中で、どのような指導をすればよいのでしょう。具体的な「読むこと」教材を取り上げて、考えてみましょう。

五年 筆者の考えをとらえ、自分の考えを発表しよう
「見立てる」「生き物は円柱形」 配当時間 読む6 書く1

本単元の学習内容は、大きく次の二点といえます。

(1) 筆者の考えを捉える。

(2) 筆者の考えについて自分の考えをもち、発表する。

学習の進め方としては、まず、欄外の問いを手がかりにしながら、短い第一教材「見立てる」を使って、筆者の論の展開のしかた（構成・例の取り上げ方・キーワード等）と、筆者の考えを把握することを、一～二時間で学びます。第二教材「生き物は円柱形」では、第一教材での学習を土台とし、学習の手引きを参考に、

①共感・納得、疑問を明確にする。

②文章の構成を捉える。

③筆者の考え、論の進め方を、要旨としてまとめる。

④筆者の考えについて、自分はどう考えるのかをまとめて発表し合う。

という学習を、五～六時間で進めることになります。

ここで、計画どおりに学習を進められるか、変更をしなくてはならないかは、指導者が目の前の児童の実態をどう把握し、身につけさせたい力をどう見極めるかによるところが大きいといえるでしょう。この二点を的確に見抜くことで、省くことと省けないことが明確になるのです。

要約の学習経験が少ないので、要約力をつけたいとき

このとき、学習の手引きにある「▼この文章の要旨を百五十字以内でまとめよう。」という学習は外せません。しかし、「百五十字」という枠は、実態や学習経験から「二百字以内」や「百八十字を目安に」に変更できるでしょう。さらに、要約の前提として、文章の簡単な構成を「始まり・中の前半・中の後半・まとめ」の四つに分けて押さえ、それぞれの内容を短くまとめる学習（②）も欠かせないでしょう。つまり、これ以外の①・④は省き、②・③に力を注げば、指導時間も保証されるといえます。

自分の考えを伝えること、自分の考えをもつこと自体が苦手な児童が多く見られるとき

この場合、いちばん大切にしたい学習が、作品を読んで感じたことを、共感・納得と疑問という二つの視点でまとめること（①）です。もし、自分の考えをもつという学習経験がきわめて貧困な実態ならば、その第一歩となるこの学習だけに力を入れ、文章の一文一文に共感や疑問のマークを付けるといった学習を取り入れることが考えられます。もちろん、このとき、②や③の指導は省きます。④についても、文章全体についてではなく、「始まり」の部分のみについての自分の考えの発表としてもよいでしょう。

ただ、ここで省いた学習は、省きっぱなしにすることはできません。重点的な指導や取り立て指導によって児童の実態が改善されたときに、他の教材で補完していかなければなりません。その際には、二時間必要だと思っていたところが、一時間で目標を達成するといううれしい誤算に出会うこともあります。

この補完のためにも、教師は、年間指導計画をつねに念頭に置き、どの教材でどの活動をプラスしていくかの見通しをもたなくてはなりません。例えば、前述したように、「要旨を捉えること」に重点を置いて「自分の考えをもち、発表すること」を省いた場合には、後の教材「ゆるやかにつながるインターネット」で、自分の考えを書きまとめ、発表する活動をしてから、友達との話し合いに臨むという学習計画を立てること等が考えられるでしょう。

教師は、いつも目の前の児童をしっかりと見つめ、柔軟に指導をしていきたいものです。

安田恭子（やすだきょうこ）
福島県生まれ。新宿区立津久戸小学校教諭をスタートに、西東京市、中野区を経て、新宿区立西戸山小学校で定年退職を迎える。日本国語教師の会、欅の会会員。共著に、『小学校国語科学習指導の研究』シリーズ（東洋館出版社）などがある。

3 「感情／生き物はつながりの中に」（六年）

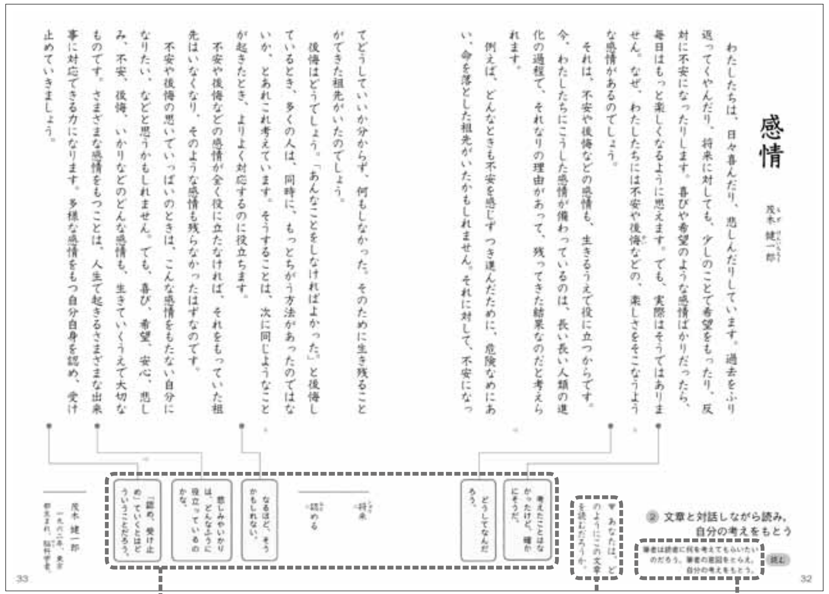
玉川大学 通信教育部教職センター 教授 輿水かおり

「教材研究のススメ」第一回では、「読むこと」の教材研究の三つの視点（読者・学習者・指導者として）を、第二回は、その視点から実際に読んでいく過程について、具体的な教材を例に紹介しました。

今回は、二教材一単元構成の説明的文章を取り上げ、「指導者として」の読みに重点を置いた教材研究について、具体的に述べていきたいと思います。

単元のねらい、教材の特徴をつかむ

六年の第二単元「文章と対話しながら読み、自分の考えをもとう」は、二つの教材がセットになって構成されています。第一教材「感情」（茂木健一郎）は、見開き二ページ、六段落の短い文章。その後、第二教材「生き物はつながりの中に」（中村桂子）が六ページ、七段落で続きます。単元名の「文章と対話する」とは



●リード文
次のように言葉を当てはめて読むと、意図がよく分かる。
・筆者（茂木健一郎・中村桂子）は読者（読み手であるあなたたち）に何を考えてもらいたいのだろう。
・筆者（茂木健一郎・中村桂子）の意図をとらえ、自分（あなた）の考えをもとう。

●呼びかけ（課題）
読み手である児童に、直接呼びかけている。

●内言の例

どういうことでしょうか。

まず、単元名とともに示されたリード文に着目しましょう。ここからも分かるように、「筆者は何が言いたいの、何を伝えたいの」と考えながら読む態度、「あそうなのか、そう言いたかったのか！」と気づき、理解する力、または、「ううん、本当にそうなの？　ああ、なるほどそういうことか」と反応しながら読む力を育てることが、この単元のねらいなのです。

さらに、そこでとどまるのではなく、「筆者の言うことについて私はこう思う、こう考えた」と表現する力をつけるところまでが求められているといえます。つまり、「主体的な読み手になるための能力」をつけることを目的にした単元なのです。「▼」の呼びかけ（課題）からも、それが読み取れます。

では、なぜ、二つの文章がセットなのでしょうか。光村図書の教科書では、第三学年以上の説明的文章に、こうした二教材構成の単元が位置づけられています。それは、児童に自力で読む力をつけてほしいという願いによるものです。

〈二教材構成の単元〉
三年 2 読んで、かんそうをもとう
・「イルカのねむり方」（幸島司郎）
・「ありの行列」（大滝哲也）
四年 2 読んで、自分の考えをまとめよう
・「大きな力を出す」（西嶋尚彦）
・「動いて、考えて、また動く」（髙野 進）
五年 2 筆者の考えをとらえ、自分の考えを発表しよう
・「見立てる」（野口 廣）
・「生き物は円柱形」（本川達雄）
六年 2 文章と対話しながら読み、自分の考えをもとう
・「感情」（茂木健一郎）
・「生き物はつながりの中に」（中村桂子）

従来の教師主導の授業では、全ての児童に十分な「読む能力」を保証することはとても困難です。与えられた教材について一定の理解はできるかもしれませんが、その学習で身につけた力を使って、他の文章、他教科の資料等を読み取る力にまで高めることはなかなかできません。

そこで、第一教材で丁寧に文章との「対話のしかた」を学び、その学習成果を使って、第二教材では主体的に自力で読み進めるという構成が取り入れられているのです。

第一教材「感情」の欄外には、「あなたは、どのようにこの文章を読むだろうか」という呼びかけに応ずる形で、読み手が発するであろう内言の例が示されています。これを児童の内言モデルとして活用すると効果的です。その際、符号や記号を使って表現するなど約束事を決めておくのも効率的です。この例以外にも、自分のクラスの子どもならどんな反応を示すか、一人一人の顔を思い出して想像しておくと、しっかり受け止めることができるでしょう。

〈反応例〉
・たしかにそうだ!!
・どうしてなんだろう??
・なるほど、そうかもしれない！
・「……」とはどういうことだろう？
・うん、うん。あるある、こんなこと。
・そんなの、ありえない。
・茂木さんっておもしろい。そう考えるんだ。

筆者の意図をつかむ

「たいせつ」を活用させる

一読しただけでは、「？」ばかりの一方的な対話になることも予想されます。そこで、筆者が読者に何を考えてもらいたいのか、正しく理解するために詳しく読んでいく、次の段階に導きます。そのためには、既習事項を想起させることが大切です。言語能力は、既習事項を活用した学習活動を繰り返し行うことでしか定着しません。例えば、六年では、次のような既習事項が考えられるでしょう。

・筆者の付けた題名の意味を考える
・問いと答えの文を探す
・何度も出てくる言葉に着目し、段落の中心となる語や文をつかむ
・接続語に注意して段落相互の関係をつかむ
・事実と、筆者の意見や考えを整理する
・文末に注意して意見とその理由をつかむ
・例や比喩に着目し、筆者の思いをつかむ

これらの内容は、教科書の各単元の「たいせつ」コーナーにまとめて提示されているので、それを振り返ることも必要です。本単元の「たいせつ」では、「筆者の意図をとらえ、自分の考えをもつには」として、次の三点が新たに示されています。

> たいせつ
>
> **筆者の意図をとらえ、自分の考えをもつには**
>
> ・筆者が、どのような事実を例として挙げ、自分の考えの理由や根拠としているのかをとらえる。
> ・筆者は、文章を通じて、読者に何を考えてほしいのか、どんな行動をしてほしいのかなど、筆者が文章を書いた目的を考える。
> ・「わたしならこうする。」などと、自分の知識や経験、読書体験に引き寄せて考える。

新たな「たいせつ」が出てくるたびに、専用ノートに書き写させるなどしてまとめておくと、国語以外の教科でも、日常的に活用できます。

さて、第一教材は、「感情」という現象を脳科学から説き、分かりやすく表現した文章です。不安、後悔といった、一見、負の感情に思われるものであっても、実は、生きていくために備わった感情であることを説いています。

第二教材は、「生き物とロボット」の違いについて、それぞれの仕組みを比較・対照しながら、理由と根拠を明らかにするという手法で説明し、生きていることのかけがえのなさ、生き物がつながっていることのすばらしさを率直に伝える文章です。

この脳科学者と生命科学者の書きおろしに、次世代に向けた温かくも力強いメッセージが込められていることが見て取れます。ぜひ、児童にこのメッセージを受け止めさせ、筆者との密度の濃い対話を経て、自分の思いや考えを発信させたいものです。

そのための具体的な指導につながる二つの文章の構成をまとめてみました。それが次ページの　です。まとめの時間の板書計画等の参考ともなるものです。矢印の使い方、色分け、枠囲みなど、自分なりの工夫を加えることもできるでしょう。

また、学習の手引き2「考えたことを友達と交流しよう。」では丁寧な指導が求められます。ここでは、自分の考えをもつための効果的な言語活動を設定することが大切です。感想や質問を取り入れた筆者への手紙を書く、自分なりの具体例を考えた意見文を書く、学級の実態を反映したグループ討議や話し合い活動など、自分の考えをもつことを促すような手立てを工夫したいところです。教科書に例示されている、読書体験や自分の生活経験を活用する方法もありそうです。

● ● ●

今回は、説明的文章の教材研究について考えてきました。

・単元名・リード文から学習のねらいを明確にする。
・手引きを参考に学習の手順を理解し、見通しをもつ。
・既習事項を想起し、それらを活用して課題解決に当たる。
・短い第一教材では欄外の内言を、第二教材では「たいせつ」を参考にする。

こうした手立てにより、自力で読み解き、読み進める力を身につけさせたいものです。

「感情」

喜んだり
希望をもったり
→ 楽しい「感情」

悲しんだり
くやんだり（後悔）
不安になったり
→ 楽しさをそこなうような「感情」

なぜ、…楽しさをそこなうような感情があるのでしょう。（問い）

←

役に立つからです。（答え）

例えば、不安…
後悔…（例）

←

役に立たなければ、…残らなかったはず（二重否定・根拠の補強）

どんな感情も、生きていくうえで大切

←（まとめ・筆者の考え）

自分自身を認め、受け止めていきましょう。（筆者のメッセージ）

「生き物はつながりの中に」

イヌ型ロボット　生き物であるイヌ

どこがちがうのでしょう

ちがいを考えながら、生き物の特徴をさぐってみましょう。

同じに見えます↓ 本当に同じでしょうか

←（あらためて問う呼びかけ）

・外から取り入れたものが自分の一部になる…ようなつながり方＝生き物の特徴（呼吸や栄養と電池）
・変化・成長しながら、一つの個体として時間をこえてつながっている＝これも生き物の特徴（体重や身長、芸や思考）
・過去や未来の生き物たちとつながっている＝生き物の特徴（母から生まれる）

←（身近な例）

このつながりこそが…ロボットとのちがい

←（まとめ・筆者の考え）

あなたは、…かけがえのない存在…生きていることが、とてもすてきに思えてきませんか。自分自身のことが大切…他も大切であるという気持ちになりませんか。（筆者のメッセージ・投げかけ）

こしみず・かおり　広島県生まれ。二十三年の教員生活の後、港区教育委員会指導主事、東京都教育庁主任指導主事、小学校校長等を経て、現職。光村図書小学校「国語」教科書の編集委員を務める。

一年生の書写指導

山梨大学教育人間科学部附属小学校教諭
中込繁樹（なかごみ しげき）

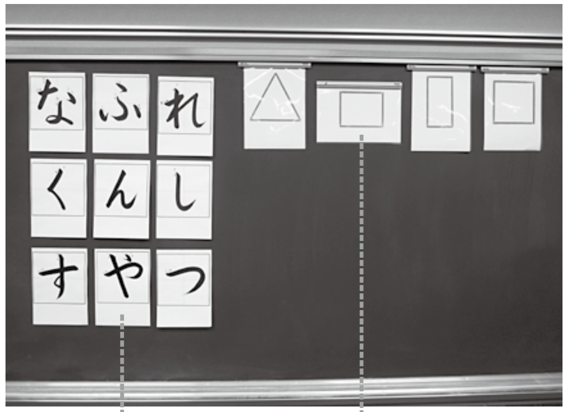
入学したばかりの子どもたちは、学校の勉強に興味津々。
字の書き方も、早く習いたくてしかたがないといった様子です。
しかし、お手本の字をまねして何回も書き続ける（練習する）だけの授業ならば、
やがて、その興味も薄れていってしまうことでしょう。
そのため、子どもたちが文字について考えを巡らせるような、指導のアイデアが必要となってきます。
書く前に、文字の原理・原則がどのようになっているのか、一年生なりに考え、
それを友達と交流し、さらに気づきを深めながら書くことにつなげる学習場面を設定しました。

1 教材名「じの　かたち」（教科書P８）

字の形（外形）を指導するときには、図形を用いることが一般的です。例えば教科書では「く」は縦長の長方形として示されています。しかし、「この字は、この図形」と、画一的に教えるだけでは、子どもたちの外形への認識は深まることはないでしょう。そこで、どのような外形になるのかを、子どもたちが自ら考えていく学習活動を設定しました。

教具の工夫

・長方形や正方形、三角形などの枠（外形）を書いた透明のシートを、黒板に掲示する。
・画用紙などに字を書いた、文字カードを作成する。
※パソコンで作成し、電子黒板等で提示することも考えられる。



文字カード　枠を書いた透明シート

指導の実際

①シートに書いた図形の枠を部屋にたとえて、子どもたちに、「この形の、お部屋に入る字は、どれでしょうか。」と問う。
②透明シートの下から、文字カードを少しずつ挿入していく。子どもたちは、自分たちの選んだ文字が部屋（外形）に入るか、興味をもって眺め、黒板に注目していた。
③文字が枠内にぴったり入っているか確かめる。
・入っていなければ、なぜ入らないのかを考え、入りそうな部屋を探させる。入っていたら、他にも合いそうな部屋がないか、別のものでも試してみるようにする。
・それぞれの文字にふさわしい外形があることを知り、外形に留意して書くことを確かめる。
④外形を枠取ったワークシート等を使用し、書く活動を行う。学習指導書付録CD-ROMを活用することもできる。

このように、外形を部屋に見立て、それにどの文字が収まりそうかを考え、話し合いながら書くことで、子どもたちの外形への認識は深まっていくことでしょう。

▲長方形の枠を書いた透明シートの下から，「つ」の文字カードを差し込んでいく。

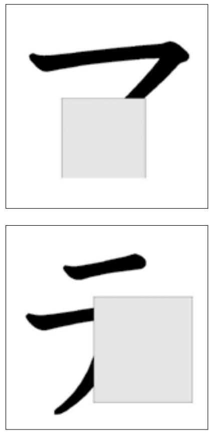
▲「つ」の外形は長方形なので，文字が枠内にぴったりとはまる。

2 教材名「かたかな　大しゅうごう」（教科書P18）

片仮名の画は直線的であり、字形が似通ったものが多くあります。そのため、少しの違いで別の片仮名になってしまうことも起こりがちです。書く際には、似ている片仮名の、違う部分を理解しておくことが肝要です。子どもたち自身がその違いに気づけるよう、次のような指導の工夫をしました。

教具の工夫

・片仮名とそれを隠す図形をパソコンで作成し、大画面に投影する。



▶例えば，上の図では，隠れている片仮名がマ・ヌ・フ・ス・アのように見える。下の図では，ラ・テのように見える。

・片仮名の文字カードを用意する。

指導の実際

①部分を隠した片仮名を、プロジェクターなどを使って提示する。子どもたちには、どの片仮名なのかを推測するよう促す。推測から出された片仮名の文字カードを黒板に掲示していく。

②子どもたちの反応を見ながら、隠している部分を徐々に明らかにしていく。

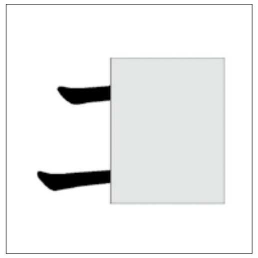
・「ユ」の場合、初めは「二」にも「コ」にも「エ」にも見える。隠れた部分を少しずつ明らかにしていく過程で、画の長さや方向、画の間などを手がかりに、子どもたちは、どの片仮名なのかを類推するようになる。

③どの片仮名かが明らかになったところで、子どもたちからの発言を整理しながら、その片仮名の特徴を確認する。

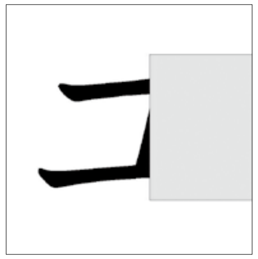
④形の違う部分に気をつけながら、書く活動へと入る。

　このような学習活動を通して、子どもたちは、楽しみながら、どこに違いがあるのかに自然に気づき、その違いを意識して書くようになる。

〈発言例〉



・「ニ」だよ。
・「ユ」じゃないかな。
・「コ」かなあ。



・「ユ」だよ。だって、真ん中の棒（縦画）が、斜めだよ。
・「コ」かもしれないよ。右の方がどうなっているのか分からない。

・「ユ」だ！
・下の棒（横画）が右に長くなっている。
・横の棒が折れて、縦の棒になっていたんだ。

3 単元名「学んだ ことを 生かして かこう」（教科書P28）

　一年間が終わるころになると、子どもたちは、平仮名、片仮名、漢字と、たくさんの文字を書けるようになります。その一方で、書き慣れてくると、整えて書くことがおろそかになりがちです。最後の振り返りの単元においては、もう一度自分の字を見つめ直して、文字を正しく整えて書く意識をもつことを身につけてほしいものです。そこで、「粘土で字を書こう（作ろう）」という学習活動を設定しました。

教具の工夫

・事前に、粘土と粘土板を準備することを伝えておく。

指導の実際

①自分の苦手な平仮名を発表させる。

②粘土板を半分に区切って使うことを指示する（真ん中に鉛筆などを置き、仕切りにするとよい）。

③何も見ずに、自分の苦手な平仮名を粘土で作るようにさせる（粘土板の左側に作る）。子どもたちは、わくわく楽しみながら形作っていった。

④同じ平仮名を、教科書を見ながら、粘土で作るようにさせる（粘土板の右側に作る）。今度は、画の長さや方向、止め、はね、払い等に気をつけながら作っていくことを指示してから活動に入らせる。子どもたちは、それらの点を注意深く見て、考えながら字を形作っていった。

⑤全員が作り終えたら、左右二つの粘土の字を比べて、整ったところを発表し合う時間を設ける。友達のものについても、どこがどのように変わったのか、気づいたことを発言させるようにする。二つの字の違いについての驚きと称賛の声を聞いて、発表した子どもはとてもうれしそうにしていた。

⑥自分の発見した課題点を意識しながら、ワークシート等に平仮名を書く学習をする。

▲教科書（P12・13）を横に置き，形をよく見ながら，粘土の字を形作っていく様子。

何も見ないで作った字（左側）に比べ，教科書をよく見ながら作った字（右側）のほうは，字形がより正確に再現されている。

　粘土で字を作ることで、細かな点にも目が向き、じっくりと文字に向かい合うことができます。また、それは、既習の学習を生かしながら、どのようにしたら正しく整った文字にすることができるのかを考えることにもつながります。発表で友達に伝えることを通して、課題が明確になり、筆記具を使用するときにも、それを意識しながら書くことができるようになるでしょう。

　入学したばかりの子どもたちにとって、学びと遊びの境界線はきわめて不明瞭といえます。子どもにとっては字を書くのも遊びのうち。字を書くことは楽しいことの一つです。そして、いろいろな字を学んで書けるようになったことを素直に喜びます。そのような、文字に対する興味や学ぶ意欲を、いつまでももち続けていってもらいたいものです。

　そのために、教材や教具に工夫を凝らし、子どもたちが進んで考え、それを友達と互いに交流させながら、学びを深めていく学習の場面を生み出していきたいと考えています。新学期のスタートにあたり、一年生の子どもたちが楽しんで取り組む書写授業を実現するための、アイデアをご紹介しました。

「常用漢字表」改定に伴う措置と教科書体に関するご質問について

■「常用漢字表」改定に伴う措置について

平成二十二年十一月、一九六字を追加し五字を削除した、新「常用漢字表」が告示されました。「常用漢字表」の改定は、昭和五十六年の告示以来、二十九年ぶりとなります。追加された一九六字は、全て中学校で学習することと決められました。また、改定に伴い、平成二十三年三月に学校段階別の「音訓の割り振り表」が示されました。これにより、小学校学習漢字についても十六の音訓が追加され、小学校で学習する「付表の語」が一語付け加わるなどの変更がありました。

「常用漢字表」の改定に伴って追加された常用漢字の音訓および「付表の語」についての、学校教育での取り扱いに関しては、文部科学省の通知に、次のように記されています。

2　追加音訓等の取扱いは、平成二十四年度から実施すること。なお、平成二十三年度においても、その必要性や使用頻度等を勘案し、児童生徒や地域の実態等に応じて、適宜取り扱うことができること。

これを受け、平成二十四年度用の小社小学校「国語」教科書では、漢字の音訓追加に合わせ、教材末漢字欄で提示する読み方を追加するとともに、教材本文中の表記を改めております。追加された音訓および「付表の語」の、教科書での初出箇所は左表のとおりです。この、「提出箇所」以降では、教科書本文の表記を改めておりますので、当該学年および上学年でのご指導の際にはご留意ください。

学年	漢字	追加音訓	提出箇所
1	中	ジュウ	二年上38ページ
3	委	ゆだねる	三年下41ページ
3	育	はぐくむ	三年上115ページ
3	館	やかた	三年上36ページ
3	全	すべて	三年上59ページ
3	速	はやまる	三年下97ページ
3	他	ほか	三年下110ページ
3	放	ほうる	三年下86ページ
4	関	かかわる	四年上27ページ
4	側	がわ※	四年下109ページ
4	要	かなめ	四年上46ページ
4	類	たぐい	四年上27ページ
5	応	こたえる	五年35ページ
5	混	こむ	五年100ページ
5	務	つとまる	五年187ページ
6	私	わたし	六年101ページ
6	創	つくる	六年42ページ
	真面目	まじめ	四年下51ページ

※「側」は、「かわ」から「がわ」への訓の変更です。

また、前出の表には掲げておりませんが、小学校学習漢字および「付表の語」に関する「常用漢字表」の他の変更点に、「十」の「ジッ」という音の備考として、「ジュッ」とも読むことが示されたこと、また、「付表の語」の「お母さん（おかあさん）」「お父さん（おとうさん）」が、「母さん（かあさん）」「父さん（とうさん）」へ変更されたことがございます。教科書では、巻末の漢字付録や、六年巻末の「特別な読み方をする言葉」一覧において、これらの変更を反映させております。

なお、「常用漢字表」改定に伴う教科書本文表記の変更は、平成二十四年度用の小社小学校「書写」教科書においても同様に行っております。ご留意ください。

この、「常用漢字表」改定への対応として、平成二十四年度の四～六年生用の漢字学習シートを作成し、次ページ以降に掲載いたしました。これらは、当該学年より前学年に配当されている漢字の追加音訓等を学習するためのシートです。教科書では既習音訓として扱っておりますので、学年の比較的早い時期に、必要部数をコピーしてお使いいただければと存じます。

三年生は、「中」の「ジュウ」という音が未習ですが、三年上巻第一単元「きつつきの商売」において頻出しますので、その機会を捉えてご指導いただければ幸いです。

■教科書体に関するご質問について

平成二十三年度用教科書が使用され始めてから、編集部には、漢字の字形に関する問い合わせがいくつか届いております。例えば、「園」の十二画目、「返」の四画目の止め・払いに関するものがそれです。

小社教科書の教材本文で使用している「光村教科書体」は、「小学校学習指導要領」の「別表　学年別漢字配当表」にある漢字書体を基本に作られています。しかし、この「学年別漢字配当表」に示された漢字には、同じ部首や同じ構成要素でも違う形で示されているものがあり（「発」と「登」の「はつがしら」の形の違いなど）、それに沿って作られた「光村教科書体」の字形に対して、これまでも、先生方から問い合わせをいただくことがありました。

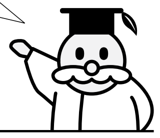
これらの経緯を踏まえ、小社では長年、読みやすく、手書き文字の手本になり、児童の漢字学習に資する、よりよい漢字活字となるよう、一〇〇六字の字形を細部にわたり検討してまいりました。そして、平成二十三年度用教科書から、新しい「光村教科書体」を用いて教科書を作成しております。

新しい教科書体に変更したことで、一部の文字で、「学年別漢字配当表」に示された字形と異なるものがありますが、これは、「字形の違い」であって、「字体の違い」ではなく、その差異によって誤りとなる性質のものではありません。「小学校学習指導要領解説　国語編」でも、「学年別漢字配当表」に示された漢字について、「字体に対する一つの手掛かりを示すものであり、これ以外を誤りとするものではない。児童の書く文字を評価する場合には、『常用漢字表』（昭和五十六年内閣告示）の『前書き』にある活字のデザイン上の差異、活字と筆写の楷書との関係なども考慮することが望ましい。」と記されております。平成二十二年告示の新「常用漢字表」では、より多くの具体例を挙げて字体についての解説が示されていますので、これらも参考にしていただきながら、漢字のご指導にあたっていただければと考えております。

← 次ページ以降に漢字学習シートを掲載しました。コピーしてお使いください。

漢字の練習　四年生

名前［　　　　　　］



中	委	育	館	全	速	他	放
チュウ ★ジュウ なか	イ ★ゆだねる	イク そだつ そだてる ★はぐくむ	カン ★やかた	ゼン まったく ★すべて	ソク はやい ★はやめる ★はやまる	タ ★ほか	ホウ はなす はなつ はなれる ★ほうる

▼①～⑧の□には、同じ漢字が入ります。読み方をヒントにして、当てはまる漢字を答えましょう。

① 決定は、□(い)員長の考えに□(ゆだ)ねる。

② □(た)者から、□(ほか)の意見も聞きたい。

③ この本の□(なか)には、世界□(じゅう)の話がある。

④ 花を□(そだ)てて、ゆたかな気持ちを□(はぐく)む。

⑤ □(ぜん)国大会に、□(すべ)ての都道府(ふ)県が参加(さんか)する。

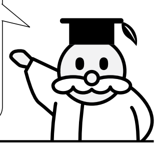
⑥ だんだんと車の□(そく)度が□(はや)まる。

⑦ 図書□(かん)で、ぶしの□(やかた)について調べる。

⑧ □(ほう)課(か)後の校庭で、ボールを□(ほう)る。

漢字の練習　五年生①

名前［　　　　　　］



中	委	育	館	全	速	他	放	関	側	要	類	真面目
チュウ ★ジュウ なか	イ ★ゆだねる	イク そだつ そだてる ★はぐくむ	カン ★やかた	ゼン まったく ★すべて	ソク はやい ★はやめる ★はやまる	タ ★ほか	ホウ はなす はなつ はなれる ★ほうる	カン せき ★かかわる	ソク ★がわ	ヨウ ★かなめ	ルイ ★たぐい	★まじめ

▼次の――線部の読み方を確(たし)かめましょう。

① 一日中、楽しい気持ちで過(す)ごす。　［　　　　］

② 全ての人が意見を言う。　［　　　　］

③ 親鳥がひなを育む。　［　　　　］

④ 類いまれな才能(のう)だ。　［　　　　］

⑤ 決定を人に委ねる。　［　　　　］

⑥ うさぎの世話に関わる。　［　　　　］

⑦ 他に用意するものはないか確かめる。　［　　　　］

⑧ ボールを遠くに放る。　［　　　　］

⑨ 車の速度が速まる。　［　　　　］

⑩ 外側から色をぬっていく。　［　　　　］

⑪ 古い館について調べる。　［　　　　］

⑫ かれはチームの要だ。　［　　　　］

⑬ 真面目に取り組む。　［　　　　］

中（チュウ ★ジュウ なか）　委（イ ★ゆだねる）　育（イク そだつ そだてる ★はぐくむ）　館（カン ★やかた）　全（ゼン まったく ★すべて）　速（ソク はやい はやめる ★はやまる）　他（タ ★ほか）　放（ホウ はなす はなつ はなれる ★ほうる）　関（カン せき ★かかわる）　側（ソク ★がわ）　要（ヨウ ★かなめ）　類（ルイ ★たぐい）　真面目（★まじめ）

漢字の練習　五年生②

名前［　　　］

▼――線部を、漢字を使って書きましょう。

① 決定は、先生にゆだねる。［　　　］
② 二人の友情をはぐくむ。［　　　］
③ すべての人の意見を聞く。［　　　］
④ 電車の速度がはやまる。［　　　］
⑤ ボールを遠くにほうる。［　　　］
⑥ 話し合いにかかわる。［　　　］
⑦ たぐいまれな作品だ。［　　　］
⑧ まじめに練習する。［　　　］

▼同じ記号には、同じ漢字が入ります。それぞれの記号に入る漢字を考えましょう。

・世界●の博物■で◎びたい。
・この★に重▲なことはありますか。
・●◎校の向かい◆に、古い■がある。
・かれはチームの▲だ。
・★人には、知られたくない◆面がある。

◎＝［　学　］　●＝［　　　］　■＝［　　　］
★＝［　　　］　▲＝［　　　］　◆＝［　　　］

中（チュウ ★ジュウ なか）　委（イ ★ゆだねる）　育（イク そだつ そだてる ★はぐくむ）　館（カン ★やかた）　全（ゼン まったく ★すべて）　速（ソク はやい はやめる ★はやまる）　他（タ ★ほか）　放（ホウ はなす はなつ はなれる ★ほうる）　関（カン せき ★かかわる）　側（ソク ★がわ）　要（ヨウ ★かなめ）　類（ルイ ★たぐい）　応（オウ ★こたえる）　混（コン まじる まざる まぜる ★こむ）　務（ム つとめる ★つとまる）　真面目（★まじめ）

漢字の練習　六年生①

名前［　　　］

▼次の――線部の読み方を確かめましょう。

① 一日中、楽しい気持ちで過ごす。［　　　］
② 古い館について調べる。［　　　］
③ 親鳥がひなを育む。［　　　］
④ 他に用意するものはないか確かめる。［　　　］
⑤ 全ての人が意見を言う。［　　　］
⑥ 車の速度が速まる。［　　　］
⑦ 決定を人に委ねる。［　　　］
⑧ ぼくに委員長が務まるか心配だ。［　　　］
⑨ うさぎの世話に関わる。［　　　］
⑩ 朝は電車が混む。［　　　］
⑪ かれはチームの要だ。［　　　］
⑫ 類いまれな才能だ。［　　　］
⑬ 期待に応える。［　　　］
⑭ 外側から色をぬっていく。［　　　］
⑮ ボールを遠くに放る。［　　　］
⑯ 真面目に取り組む。［　　　］

平成24年度用教科書　訂正箇所のお知らせ

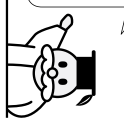
平成24年度用１～４年上巻および５・６年教科書では，「常用漢字表」改定に伴う表記の変更に加え，平成23年度から以下の箇所を訂正しております。校内の先生方でご確認のうえ，ご指導の際には，十分ご留意くださいますよう，お願いいたします。

なお，「常用漢字表」改定に伴う表記の変更につきましては，本誌24・25ページをご参照ください。

学年	ページ	行	23年度	24年度
3年	84	手紙例	大田_あすか	大田あすか
	85	はがき・封書	山下_のりこ	山下のりこ
	127	2段目2～3	むすび	むすびのあいさつ
5年	7	1段目 17～21	すいせんするときは、その事物や人物について十分調べ、そのよさを整理し、求められていることを考えたうえで、すいせんしたい点をまとめる必要がある、など。	すいせんするときは、求められていることを考えたうえで、その事物や人物について十分調べ、そのよさを整理し、すいせんしたい点をまとめる必要がある、など。
	28	下段写真		バイカウツギからウツギの写真へ変更。
	36	下6	鳴・信・動	鳴・信・林
	53	上1	祇園精舎	祇園精舎
	99	下11	挙げられているほかに、	挙げられているものの他に、
	100	欄外	（挿入）	混み合う ※「常用漢字表」改定に伴い、新出音訓として抽出する語に変更が生じたため。これに伴い、「混雑」の「混」に付した白丸を削除する。
	123	書名	河合雅雄（かわいまさお）の動物記	河合雅雄（かわいまさを）の動物記
	129	5	八十五か所	八百五十か所
	140	グラフ内	1人1日当たり	一人1日当たり
	176	下13	宝（たから）	たから
6年	32·33	罫線（青）		※対応する各文末から伸ばすよう、位置の修正を行う。
	185	6段目4	ピアニカ	リコーダー
	217	筆者名	河合雅雄（かわいまさお）	河合雅雄（かわいまさを）
	230	筆者名	河合雅雄（かわいまさお）	河合雅雄（かわいまさを）
	232	17·18	孵化	羽化
	233	10	孵化	羽化

漢字の練習　六年生②

名前［　　　　］



中　チュウ　★ジュウ　なか
委　イ　★ゆだねる
育　イク　そだつ　そだてる　★はぐくむ
館　カン　★やかた
全　ゼン　まったく　★すべて
速　ソク　はやい　はやめる　★はやまる
他　タ　★ほか
放　ホウ　はなす　はなつ　はなれる　★ほうる
関　カン　★せき　かかわる
側　ソク　★がわ
要　ヨウ　★かなめ
類　ルイ　★たぐい
応　オウ　★こたえる
混　コン　まじる　まざる　まぜる　★こむ
務　ム　つとめる　★つとまる
真面目　★まじめ

▼①～⑫の□には、同じ漢字が入ります。読み方をヒントにして、当てはまる漢字を答えましょう。

① 決定は、□（い）員長の考えに□（ゆだ）ねる。［　　］
② □（そく）面図は、たなの右□（がわ）に置いてある。［　　］
③ 花を□（そだ）てて、豊かな気持ちを□（はぐく）む。［　　］
④ 図書□（かん）で、武士の□（やかた）について調べる。［　　］
⑤ □（ぜん）国大会に、□（すべ）ての都道府県が参加する。［　　］
⑥ だんだんと車の□（そく）度が□（はや）まる。［　　］
⑦ □（ほう）課後の校庭で、ボールを□（ほう）る。［　　］
⑧ 重要な任□（む）が□（つと）まるか心配だ。［　　］
⑨ □（かん）係のない話には□（かか）わらない。［　　］
⑩ 書□（るい）に、□（たぐ）いまれな案が書かれている。［　　］
⑪ □（おう）えんする人の期待に□（こた）える。［　　］
⑫ 電車が□（こ）んでいて、□（こん）乱する。［　　］

▼次の――線部を漢字で書きましょう。

① ほかに意見はありませんか。［　　］
② 日本じゅうの昔話を集める。［　　］
③ かれは守備のかなめだ。［　　］
④ いつでもまじめに話を聞く。［　　］

光村ライブラリー全18巻

昭和46年から平成12年までに小学校国語教科書に掲載された中から118作品を収録。

著者＝工藤直子ほか
菊判・平均80頁
セット定価＝18,900円（各巻定価1,050円）

❶〜❺巻1・2年生/❻〜⓫巻3・4年生/⓬〜⓱巻5・6年生/⓲巻 詩

光村図書の書籍 | 〒141-8675東京都品川区上大崎2-19-9 ☎03(3493)2111 Fax 03(3493)2177 | ご注文は、最寄りの書店または弊社ホームページへ。価格はすべて税込みです。www.mitsumura-tosho.co.jp

「常用漢字表」改定への対応のための漢字学習シート

本誌24・25ページには，「常用漢字表」改定に伴う措置と教科書体に関するご質問についてのお知らせを掲載しております。また，「常用漢字表」改定への対応のための，そのままコピーしてお使いいただけるワークシートも掲載いたしました。

このワークシートは，今後，小社ウェブサイト「光村チャンネル」内でも公開する予定でおります。4月中をめどに，公開の準備を進めておりますので，こちらも合わせてご利用いただければと思います。

▶「光村チャンネル」小学校国語ページ
http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasyo/syogaku/kokugo/

光村「国語・書写デジタル教科書」をお使いのみなさまへ

平成24年度用教科書の訂正に伴う「国語・書写デジタル教科書」のバージョンアップを行います。

今バージョンアップでは，教科書の訂正箇所の反映および新機能の追加があります。書き込んだ画面の保存機能，モニタ表示調整機能などの新たな機能を加え，さらに使いやすくなりました。

詳細につきましてお尋ねの場合は，お客様窓口（03-3493-5741）までご連絡ください。

広報部便り

新コーナー「その悩み，解決します！」

今号より，先生方のお悩みにお答えするコーナーをスタートいたしました。毎号，先生方が抱えるお悩みの中から一つを取り上げ，解決のためのアドバイスを掲載していきます。毎回，コーナーの課題に合った先生にご回答いただくことになっています。

第1回のテーマは，「時間数が少ないなかでの指導」です。教科書で想定されている時数内で，その教材を学習し終えることが難しいという声を受けてのテーマ設定でした。お悩み解決のためにご登場いただいたのは，田中洋一先生と安田恭子先生。それぞれのお立場を生かしたアドバイスをお寄せくださいましたが，いかがだったでしょうか。日々の授業のご参考にしていただければと思います。

特集「教科をつなぐ言語活動」

言語活動を仲立ちとして，各教科をつなぐように学びを積み重ねていくイメージがもてるような内容になれば――そう考え，テーマと内容を位置づけました。

そのような意図から今号では，社会，算数，理科の指導を専門とする先生方にご登場いただくことにしました。編集の過程で見えた，各教科での言語活動の意味の違いは，とても興味深いものでした。

教科をつなぐ言語活動の姿が，少しでも見えるものとなったでしょうか。日々のご指導のヒントとなれば幸いです。

「国語教育相談室」のバックナンバーは，小社ウェブサイト内の会員専用ページ「光村コミュニティ」にてご覧いただくことができます。どうぞご利用ください。
https://www.mitsumura-tosho.co.jp/community/shogaku_kokugo/